

## トリカブト

### 1. 概要

キンポウゲ科の植物で、世界で約 500 種、東アジアで約 100 種が自生する(1)。全草が有毒で、毒性の強いアコニチン系アルカロイド(aconitine, mesaconitine, aconine, hyaconitine, jesaconitine 等) を含有する(2)。

根は三角錘か、かぶら状の塊根で、ひげ根がまばらにつき、色は黒褐色で、断面は白色である。根を折ったとき、白色から赤褐色から黒褐色に変色するのが猛毒である(3)(4)。

### 2. 毒性

トリカブト：葉 1g の摂取で重篤な中毒例がある(3)

根・・・マウス経口 LD50 0.5～1.8g/kg(3)

根>葉>茎の順に毒性が強い(1)。花粉が混入した蜂蜜により中毒症状が出現した例もある(2)

アコニチン含量は、新鮮な根で 0.3～2%，葉で 0.2～1.2%とされる(5)

アコニチン系アルカロイドの急性毒性(1)

aconitine：ヒト経口最小致死量 28mg/kg(9)、マウス経口 LD50 1.8mg/kg

mesaconitine：マウス経口 LD50 1.9mg/kg

hyaconitine：マウス経口 LD50 5.8mg/kg

### 3. 症状

死因の 65%は心室細動、25%は長時間の無収縮である(6)

経口摂取後の中毒症状発現は早く、ときに 10～20 分以内(5)

中毒症状は時間的推移に従って以下のように発現(2)

初期：口腔・咽頭の灼熱感・しびれ、四肢末端のしびれ、酩酊状態、心悸亢進、めまい

中期：嘔吐、流涎、嚥下困難、脱力感、起立不能

末期：血圧低下、呼吸麻痺、痙攣

### 4. 処置

家庭で可能な処置

催吐

医療機関での処置

特異的な治療法、解毒剤・拮抗剤はない

基本的処置：催吐、胃洗浄の後、吸着剤と塩類下剤の投与

対症療法：呼吸・循環管理

とくに心室性期外収縮、心室細動に対する治療が重要(6)

副交感神経亢進状態に硫酸アトロピンの投与(1mg 皮下注)(2)

### 5. 確認事項

名称：若芽の頃は、薬草のゲンノショウコや山菜のモミジガサ(別名：シドケ、シドキ、トウキチ)やセリとよく似ている(7)ので、これらの植物で中毒症状が発症している場合には、トリカブト中毒を疑う

## 6. 情報提供時の要点

- 1) 全草が有毒なので、摂取部位に関わらず、直ちに医療機関への受診を指示
- 2) 積極的な対症療法（不整脈対策，呼吸管理）が治療の中心となる

## 7. 体内動態

有毒成分であるアコニチンは、健常な皮膚および粘膜からも吸収される(5)

## 8. 中毒学的薬理作用

アコニチンの毒作用が主で、アコニチンは細胞の興奮膜の Na チャンネルに作用し、Na 透過性を増大しやすくし、Na チャンネルの不活性化を遮断する。その結果、以下の各作用臓器において種々の症状を引き起こす

中枢神経系：血圧上昇、不整脈、嘔吐、肺浮腫、体温下降

知覚神経系：局所麻酔作用

運動神経系、骨格筋：抑制作用

心筋：心拍動の亢進、刺激伝導系の障害による不整脈、拡張期の心停止

呼吸器系：肺浮腫（交感神経高位中枢の興奮による）

## 9. 治療上の注意点

- 1) 心電図検査は診断の補助手段として臨床的に有用である(2)  
受診時にほとんどの症例で不整脈が認められる（多発性、多源性の心室性期外収縮、心室頻拍、房室ブロック、脚ブロック、心房細動、上室性期外収縮など）
- 2) 死亡は大多数が発症後 6 時間以内で、24 時間生存すれば回復することが多い(8)
- 3) 現時点では、血液透析や血液灌流によるアコニチン系アルカロイドの除去効果についての調査報告はない(8)

## 10. 別名と類似作用を有す植物

別名：カブトギク、カブトバナ

類似作用を有す植物：ヤマトリカブト、オクトリカブト、  
タンナトリカブト、ダイセツトリカブト、  
カラフトブシ、エゾトリカブト（別名：テリハブシ、  
ウスバトリカブト）

## 11. 参考文献

- (1)水柿道直、他：中毒研究、2、225～228、1989
- (2)山本正和、他：救急医学、12(10)、1561～1564、1988
- (3)急性中毒情報ファイル（1986）
- (4)続続薬草カラー図鑑（1984）
- (5)A Colour Atlas of Poisonous Plants（1984）
- (6)中毒百科（1991）
- (7)毒のある植物（1983）
- (8)Poisindex（1992）
- (9)RTECS（1997）

## 12. 作成日

19900215 Ver. 1.00

ID M70181\_0100\_2